

さとう し お
佐藤 史生 インタビュー

(2007 年 9 月 20 日取材)



「夢見る惑星」小学館『プチフラワー』1981 年秋の号

米沢嘉博記念図書館・現代マンガ図書館

※「佐藤史生原画展-決して眠らない魚のみる夢-」(会期 2024 年 6 月 28 日-10 月 20 日)にて配布

佐藤史生インタビュー

私にとっての「SFのおもしろさ」というのは、「地道なハシゴ昇りのすえに唐突に開ける眺望！」／気がつく
と異様な場所に立って、見られない奇観をながめて呆然とする…そういうのが快感なんです。

ーマンガ家になろうと思われたきっかけは？

きっかけ、という事なら石ノ森章太郎先生の『マンガ家入門』（*1）を読んだこと、だと思います。高校（*2）に入学して、入った美術クラブの片隅で数人の男子先輩^{たち}達が、石ノ森先生のマンガをそっくり模写していたんです。はじめはそれが模写と^{わか}分らず^{ぎょうてん}仰天したんですが、彼らが描いたと知って本当に驚きました。そもそも私は同じ顔というのを二つと描けなかったの、マンガというものを人間が手で描いているという事が今ひとつ^ふ腑に落ちてなかった。信じてなかったわけです（笑）。でも目の前の人
が描いているし、印刷物でないことは明らか（笑）。たとえ模写であつたとしてもね。

ペンと墨汁で描いたものをはじめて見ました。エンピツの線と比べるとあまりに黒々と美しいじゃないですか。その日のうちにペンと墨汁を買って帰りました。

*1 『少年のためのマンガ家入門』秋田書店 新入門百科 1965 年刊

*2 宮城県佐沼高等学校、石ノ森章太郎、大友克洋の出身高校でもある。

ー実際に描きはじめられたのは？

鉛筆でノートに、というのは前からやっていましたが、マンガの原稿らしく描きはじめたのはそういうわけで高校一年からです。黒々としたスミ線にうっとりして、投稿しよう！と16ページ描くんですが、送る直前に正気になり結局投稿しませんでした。投稿するのはずっと後、上京して就職して、退職してからです。

ー就職してらしたのですね。

はい。印刷会社で版下をつくっていました。活字の写植を並べて、写真を置いて、割付レイアウトという仕事ですね。けっこう楽しく仕事していたのですが、やはりマンガを描きたいと思い一年半くらいで辞めちゃったんです。収入の当てもなく。

ーええー!?

ちょっとは貯金して、これで2年くらいは大丈夫だろうと思って。といってもわずかなものなんです
が、まあ私はとにかくじっとしているのが得意なのでお金使わないし（笑）。その頃、萩尾望都(*3)先生
にファンレターを出したら「遊びに来ませんか」ってお返事がきて、即飛んで行きました。萩尾先生が竹
宮恵子先生(*4)と一緒に住んでいた借家にですね。行ったその日から泊まり込んだりして。お^{むか}向いが
増山のりえ(*5)さんのお家で。あーそういえば、遊びに来て手紙をくれたのは増山さんだった！（笑）

*3 萩尾望都:1949 年生まれ福岡県出身。代表作に「ポーの一族」「トーマの心臓」「残酷な神が支配する」など。

*4 竹宮恵子:1950 年生まれ徳島県出身。代表作に「風と木の詩」「地球へ…」など。京都精華大学元学長。

*5 増山のりえ：1950-2021 年。東京都出身。増山法恵、のりす・は一ぜ名義の著作あり。マンガ原作者、小説家、音楽評論家など。竹宮恵子や萩尾望都に大泉学園のアパートを紹介した。佐藤史生の逝去後その原画を一時保管していた。

—いいですね。

まあ、若い頃はそんなモノですよ。今のようにメールもケータイもないし、泊まり込んで昼夜おしゃべりしたりして。他にもいろいろな人が出入りしてましたし(*6)。かの有名な“大泉サロン”ですね。で、あとは入り^{びた}浸って遊ぶんです、ずっと(笑)。お二人が仕事をしている時には、ベタぬりなんか手伝うんですが基本的には遊んでるので、そのうちお金がなくなってきた、結局アシスタントにしてもらいました。

*6 残された原画やデビュー前のスケッチブック等より交友関係があったことがみて取れるマンガ家は、萩尾望都、竹宮恵子の他に、伊東愛子、岡本敦子、花郁悠紀子、木原敏江、小室しげ子、坂田靖子、城章子、鳥図明児（デビュー後の可能性あり）、名香智子、平田真貴子、山岸凉子など。

—萩尾先生と竹宮先生のアシスタントですか。

入り浸り兼たまにアシスタントの仕事もして(笑)。顔見知りになった編集氏から「二十歳すぎたらとらないぞ!」と脅^{おど}かされつつ26歳までがんばりました(笑)。そのあいだ、ほとんどなにも描いていないんですよ。

デビューのきっかけになった、佳作をとった作品は「星の丘より」(*7)ってSFでした。当時はSFではデビューさせてやれないと言われて「恋は味なもの!」(*8)というラブコメディーを描いてデビューしました。デビュー後もメインの仕事はアシスタントで、結局連載の仕事がはじまって物理的に不可能になるまでアシスタントをさせてもらいました。

*7 1977 年『別冊少女コミック』10 月号掲載「第 11 回別コミ新人賞」佳作入選

*8 1977 年『別冊少女コミック』2 月号

—デビューしてから、一番嬉しかった事は？

嬉しいっていか大泉時代は楽しかったな。あ、あれはデビュー前が主か(笑)。

—悲しかったり、悔しかったりしたことは？

悲しいとか悔しいっていうのは、あまりおもいつきませんが、なんといっても締め切りが辛^{つら}かったですね。私はお話をつくるのが遅くて、まあ怠^{なま}け者なんです。で、ネームが遅れるので当然締め切りは修羅場^{しゅらば}になる。肉体的にきついのはもちろんですが、絵が荒れるので精神衛生上まことによろしくない。今考えても熱が出そうです。

—少女マンガのパワーとはなんでしょう。

うっとり感、ですかね。きれい！かわいい！情感もたっぷり。私の小さい頃は少女小説もあまりないし、映画もテレビも少女向けとは言えず、ただ少女マンガしかなかった。現実社会はもっと悲惨で美しい

ものもかわいいものもほとんど手に入りませんでしたしね。

だから、幼い頃に出会った少女マンガこそが憧れと夢の源泉でした。どんなマンガもすべて夢中で読みましたが、特に一つだけ挙げるなら水野英子（*9）先生の「星のたてごと」（*10）ですね。

SF やミステリー、そういうものがもともと好きだから、最初は少年マンガが好きでした。でも「星のたてごと」で少女マンガの方にダーッと心が傾きました。初めは雑誌で飛び飛びに読んでいて、全部読んだのは朝日ソノラマの単行本（*11）になってからです。少年マンガのスケールとダイナミズム、少女マンガの美しさとロマンチズムの両方を具現していてほんとうに、うっとりしました。女の子のままでハラハドキドキできた。その後の作家さんだと、同じように少女マンガだけれど怪盗ものなどを描いていた、飛鳥幸子（*12）さんの「怪盗こうもり男爵」（*13）などが好きでした。

*9 水野英子：1939 年生まれ山口県出身。代表作に「星のたてごと」「白いトロイカ」「ファイヤー！」など。

*10 1960-62 年『少女クラブ』連載

*11 サンコミックス 全 3 巻 1968 年刊

*12 飛鳥幸子：1949 年生まれ富山県出身。マンガ家、イラストレーター。代表作に「怪盗こうもり男爵」「白いリーヌ」など。

*13 1967 年『週刊少女フレンド』他シリーズ連載

—先生のお描きになったものからは、凛^{りん}とした美しさを感じます。日常生活を見つめて描く、というのとは別の大人っぽさがあって、独自の存在としてすごく目立ちます。

デビューした頃はもうすっかりいい歳^{とし}になっていたんで、少女マンガの「きれい、かわいい」は「ま、どーでもいいか」って感じになってしまい…（笑）。興味がすっかり別のところに行ってしまったからねえ。プロとしてこれはいかがなものか、と思われたいではなかったんですが、どうにもいたしかたなく。結局、私は意識としてプロの作家にはならず仕舞いというか、もうひたすら読み手！みたいな。だから読み手としての自分が読みたいものしか描けなかった。

—先生の作品には SF が多いですね。今でこそ、萩尾望都先生や佐藤先生が SF を描いて、少女マンガと SF って近いものだとして認識されていますが、もともとは少女マンガとは異質なものだと思われていたと思います。そこにあえて切り込んで行かれました。先生は SF の魅力をどのように考え、感じていらしたのでしょうか。

私にとっての「SF のおもしろさ」というのは、「地道なハシゴ昇りのすえに唐突に開ける眺望！」といったところでしょうか。要するに論理のハシゴを一段一段昇っていく。ジャンプは不可。ジャンプあるいは飛翔が出来たら、そんな能力があったら、SF なんか読みませんね。詩とか文学を読みます。跳ぶ能力も飛ぶ翼もないから地道に一步一步昇っていくんです。そして気がつくと異様な場所に立って、見られない奇観をながめて呆然とする…そういうのが快感なんです。

—そうか、先生の作品を「本当の異世界だ」って指摘している人がいたのですが、それは単なる空想ではなく、飛躍しすぎず理屈をたどって行って行き着く異世界なんですね。だからリアリティがある。

ほんとにそうなら嬉しいですけど。子供の頃に最初に出会った SF はアイザック・アシモフ（*14）で、今でも彼のファンなんですが、一方年齢とともに、よりディープな「奇観」を求めて、最終的にコードウ

エイナー・スミス (*15) とジェイムズ・ティプトリー・Jr (*16) にたどりつきました。二人は全く異なった作風ですが、どちらも私の理想ですね。80 年代頃に出会いました。もうお二人とも亡くなりましたが…。

ティプトリー・Jr は男性名で書いているけれど女性です。彼女は CIA で仕事をしていて、50 歳を過ぎてから SF を書き始め、SF の世界にすごい世界を切り開くんです。彼女の SF は全部定規で真っ直ぐ線を引いたような感じばかりではなく、線はつながっているけれど曲線もあるという感じでいいんですよ。おすすめ作品ですか？ スミスは『鼠と竜のゲーム』(*17)、ティプトリーは『故郷から 10000 光年』(*18) でしょうか。

新しいところではテッド・チャン (*19) かな。つまり「奇観」が楽しめる作家として。チャンはごくたまに短篇がポツと出る。それがいちいちトンデモなのでずっと追いかけていたら、ようやく文庫一冊にまとまりました。それが『あなたの人生の物語』(*20) です。これ一冊で彼の全作品が読めます。読みやすいでしょ？ 少なくとも量的には。

*14 アイザック・アシモフ：1920-92 年。ソビエト連邦生まれアメリカ育ち。生化学者、作家。日本では SF 作家として知られる。代表作に「われはロボット」「鋼鉄都市」「銀河帝国興亡史」シリーズなど。

*15 コードウェイナー・スミス：1913-66 年。アメリカ出身。SF 中心の小説家。代表作に「人類補完機構」シリーズ、「シェイヨルという名の星」など。

*16 ジェイムズ・ティプトリー・Jr：1915-87 年。アメリカ出身。SF 作家。現・アザーワイズ賞の元の賞名には彼女の名が冠されていた。代表作に「愛はさだめ、さだめは死」「たったひとつの冴えたやりかた」など。

*17 1955 年発表の「人類補完機構」シリーズ短編集。伊藤典夫・浅倉久志訳 早川書房 ハヤカワ文庫 1982 年刊

*18 1973 年発表の第一短編集。伊藤典夫訳、早川書房、ハヤカワ書房 1991 年

*19 テッド・チャン：1967 年生まれアメリカ出身。SF 作家。代表作に「あなたの人生の物語」「息吹」など。

*20 浅倉久志・他訳 早川書店 ハヤカワ文庫 2003 年刊

—お描きになったマンガの中で、特に好きなキャラクターは？

自分の描いたキャラクターはみんな好きですが、思い入れがあるのは「夢見る惑星」のイリスですね。私は「アラビアのロレンス」の映画 (*21) で人生観が変わったのですが、イリスはその影響を受けて出来たキャラクターです。ものすごく生きにくい人なんです。ロレンスがね。大変複雑な個性で。それまで好きなキャラクターというと「清く正しく美しく」一本槍^{やり}だったのが、ロレンスに惚れこんだことで「影の部分こそがいい！」というステージに移ったわけです。

*21 1962 年公開のイギリス映画。監督デヴィット・リーン、主演ピーター・オトゥール。

—なるほど…。

私は自分の家族と、あと 3 軒しか家がないところで生^うれ育ったせいか、小学校に入ってから先生やクラスメートとのコミュニケーションにかなり苦労したんです。成長していくつどに少しずつラクになっていって、大人になったら天国のようだったんですが…そんな頃ロレンスに出会ったので、人間観と人生観がひっくりかえりました。20 代のほとんど、コア的には 7 年間ほどロレンスにどっぷり浸っていま

した。

—7年！

そう。それで人間は清く正しく美しくなくてもいい。むしろ弱点にこそ感情移入できるんだと、それで描く意欲が湧きました。

—先生はたいへん寡作^{かさく}ですが、ファンはみな先生の新作を期待しております。

どう考えても私は描くより読む方が得手^{えて}（笑）。人様^{ひとさま}が作ったものを読んでいるのが幸せなんです。創作意欲が人様の5分の1位^{くらい}しかないなって思います。作品も5分の1位なので、計算の結果そういう答^{こたえ}が出ました、みたいな（笑）。

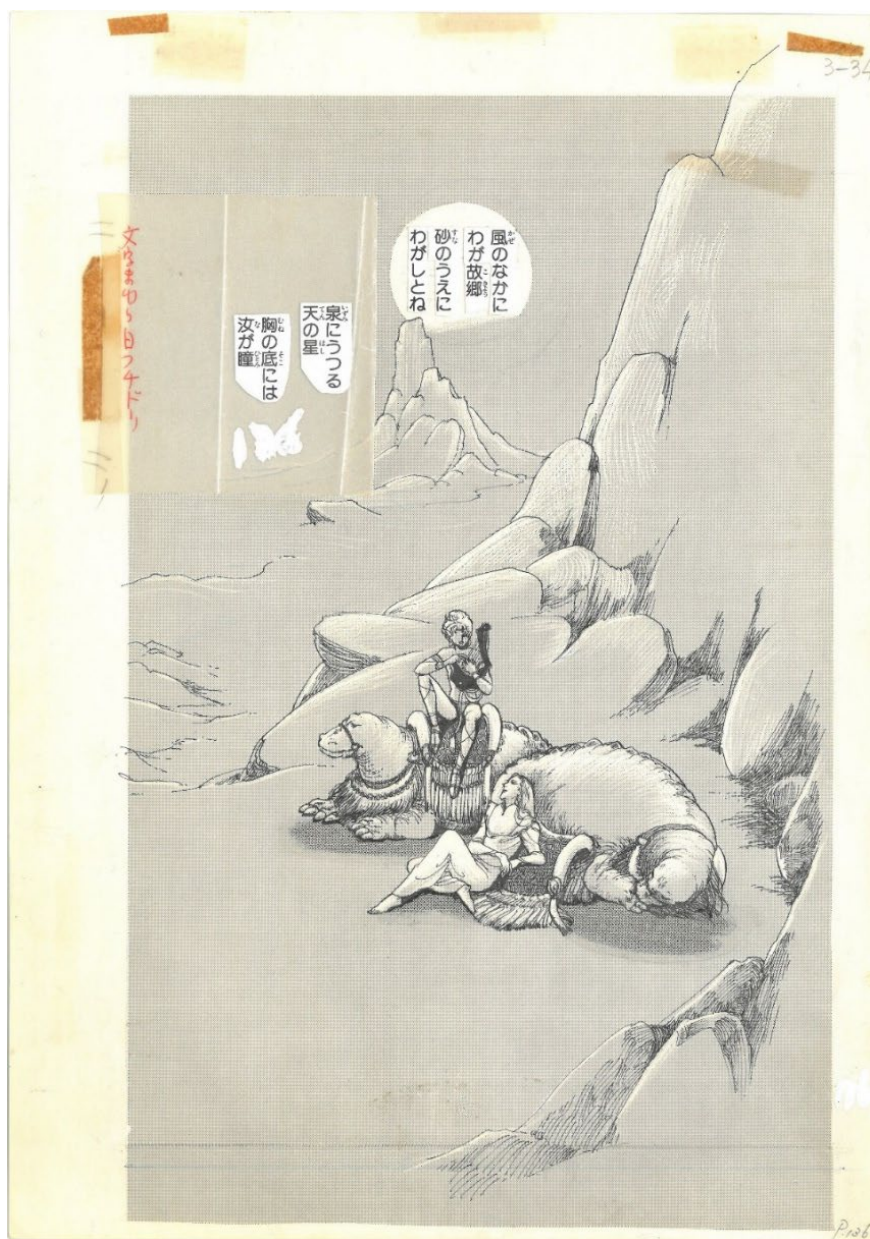
—いつまででもお待ちしておりますので、これからも頑張ってください。

（2007年9月20日取材）

聞き手：ヤマダトモコ

於：ひばりヶ丘 PARCO 内中華料理「食通店」

※このインタビューは、2008年2月16日より川崎市市民ミュージアムにて開催し巡回した「少女マンガパワー！-つよく・やさしく・うつくしく-」展の図録『少女マンガパワー!』（川崎市市民ミュージアム、2008年2月発行）のために行われたものです。各作家のインタビューをまとめたコーナーに「佐藤史生」のタイトルで掲載されました。今回、明治大学 米沢嘉博記念図書館・現代マンガ図書館での『佐藤史生原画展-決して眠らない魚のみる夢-』の展示準備に際して、このインタビューの著者校正用紙（A5ファクス用紙に手書きと切り貼りで校正が入ったもの）が見つかりました。ここに掲載したものは、図録掲載部分はそのままに、紙幅の都合で省かれていた部分を補って編集した「ロングバージョン」です。インタビュータイトル、ルビは新たに付し、表記の揺れ等はゆるやかに統一しました（泊まり込んで・泊まりこんで→泊まり込んで、お2人→お二人、所・ところ→ところ）。



「夢みる惑星」 小学館『プチフラワー』1980 年秋の号



「夢みる惑星」 小学館『プチフラワー』1981年冬の号

▼ご意見・感想ページ



▼初出リスト



▼単行本掲載リスト



発行 明治大学 米沢嘉博記念図書館・現代マンガ図書館

発行日 2024年6月28日、6月29日修正更新

※「佐藤史生原画展-決して眠らない魚のみる夢-」(会期2024年6月28日-10月20日)にて配布